

プリキュアを憎む少女

匠 良心

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒井星奈、後のプリキュアを憎む少女、なぜ彼女はプリキュアを憎むことが出来たのか、そして星奈の奇妙な出会いを果たす白戸真夜、後のヘイトレッドと名乗る少女、今、二人の少女の奇妙な物語が始まる。この世界観はプリキュウスが復活してプリキュアが世界を支配された世界、モビルスーツと怪獣は出します。そして短期連載です。

目次

1話	ことの始まり	1
2話	黒と白の出会い	9
3話	DWD入隊	23

1話 ことの始まり

ここは異世界都市アルカの霊園地

ここは異世界都市で育ち、そして死んでいった者達が眠る場所、プリキュアによつて殺された人間もここに眠っているのである。

そしてそこに汲んだ水を持ち黒の礼服を来た女性、黒井星奈が現れた。

今日は彼女の家族の命日である。

星奈「お父さん・・・お母さん・・・おばあちゃん・・・おじいちゃん・・・そして・・・りほ」

星奈は家族が眠る墓に腰かけて線香に火をつけ、手を合わせた。

星奈「もう・・・10年になるのね・・・りほ・・・今のお姉ちゃんを見たとき、あなたはこういう気持ちになるの?」

時は10年前

七色ヶ丘、その小さな家にピクニックに出かける6人の家族がいた。

その少女の名は黒井 星奈 10歳

そして妹の黒井 莉歩 5歳

そして大好きな母親と父親と祖父母

星奈達は車に乗り目的地である山に向けて出発した。

莉歩「お姉ちゃん！ピクニック楽しみだね」

星奈「うん！私もうお弁当のことで頭がいっぱいだもん！」

母「まあ、星奈ったら」

父「目的地にいたらお弁当を一緒に食べような」

祖父「ははは、星奈はわんぱくじやのー」

祖母「ええ、星奈ちゃんも莉歩ちゃんも元気があっていいことです」

車の中、周りの硝子がひび割れ、星奈はなんとか生きていた。

星奈「おじいちゃん・・・おばあちゃん」

祖父「・・・・・・・・・・」

祖母「・・・・・・・・・・」

祖父も祖母も喋らない。それに息もしていない。これはもう・・・

母「星奈・・・大丈夫？」

星奈「お母さん！」

父「みんな・・・無事か？」

星奈「お父さん！」

父も母も無事だ。でも莉歩は・・・

莉歩「お姉・・・・・・・・ちゃん・・・・・・・・」

星奈「莉歩！」

莉歩も無事だ！よかった。

星奈「お父さん！私たちは大丈夫だよ！」

父「そうか……。それじゃあ……。おまえ達が先に降りろ……。お父さん達も……。あとで行く。」

星奈「お父さん？」

最初は父はすこし息が荒い様子だったが、私と莉歩は一足早く車を降りることに成功した。

莉歩「お姉ちゃん！出れたね」

星奈「それじゃあ！お父さんも」

無事脱出した二人は今度は父と母を助けようとしたその時！

カツ！

星奈「え？」

ドオオオオオオオーーーーー！！！！！！

星奈「きゃああつ！」

莉歩「あああつ！」

突然！上空から桃色の光線が飛び出し父と母と祖父母が乗る車に直撃した。

星奈「…………え？」

パチパチパチパチパチパチ…………

星奈「お父さん？…………お母さん？…………おばあちゃん？…………おじいちゃん？…………嘘でしょ？」

あの時、星奈はまだ車の中にいた家族が無惨な姿になってしまったことは信じられなかった。まだ幼い莉歩は今の状況を理解できなかった。

その時

キュアロイド「ギギギー！」

キュアロイド「ギギギー！」

星奈「え！」

突然空から2体の人影が現れた。その姿は…………

星奈「ぷ…………プリキュア？」

莉歩「お姉ちゃん……この人達……プリキュアなの？」

莉歩はプリキュアに憧れ、自分も大きくなったら困っている人を助けるプリキュアになりたいと夢見る少女だが、今日撃しているプリキュアは何かが違うむしろ機械のようだった。

キュアロイド「ギギギー!!」

キュアロイド「ギギギー!!」

ガッ!

星奈「なっ!」

ガッ!

莉歩「え?」

そいつらは私たちを掴み上げ、私達姉妹は上空まで飛んだ。

莉歩「怖いよ!助けて!お姉ちゃん!お姉ちゃん!」

星奈「莉歩!!ちよつと離して!離して!」

キュアロイド「ギ?」

私をつかんでいるプリキュアのロボットは黙らせるため腹を思いつき殴った。

星奈「……………」

その時、私の瞳は闇に閉ざされた。

2話 黒と白の出会い

星奈「……………うう……………」

星奈はあの時、プリキュアに似たロボットに腹を殴られ、意識を失った。

そしてその意識を失い、目覚めた矢先は……………

星奈「ここは？ここはどこなの？」

辺りを見渡す星奈、そこは星奈と同じ年の娘達は何人もいて両腕と両足を鉄の錠で縛り上げて何台もある実験台のようなものにねかせている。

星奈「くうっ！うう！……………」

星奈は必死でちぎろうとするがびくともしない。

その時、

少女「ぎゃあああああああああああ！！！！」

星奈「え？」

その隣にいた少女が大きな叫び声をあげていた。

モーション「こいつも駄目か……………どうするブレイン？」

ブレイン「そうですね……………ん？」

あれは…………プリキュア？でも黒いプリキュアってキュアブラツクしか分からない…………

ブレイン「確か…………この娘は…………」

モーション「ええ、プロトプリキュアNo. 111号」

プロトプリキュア？それって私のこと……………どういこと私がプリキュア？

ブレイン「プロトプリキュアNo. 111号……………あなたが最後よ……………」

星奈「え？」

ブレイン「……………モーション、例の装置の起動を」

モーション「ええ……………」

星奈「何！一体何をするの？」

ブレイン「これより君はプリキュアになるため君が一番多く出した感情を抜き取る」

星奈「感情を抜き取る？それがプリキュアになることとどう関係あるの？」

ブレイン「いい質問ですね。感情を抜き取るということとは人間がプリキュアになるために必要不可欠なことなのです。なにかを得るにはなにかを棄てる。喜び、悲しみ、怒り、安心、憎しみ、楽しみ、幸福、感謝、絶望、嫉妬、愛情、驚き、安心、欲望、期待、優越感、劣等感などのさまざまな感情が人間にはあります。そしてその最も強い感情を抜けばその人間はより強い人間へと生まれ変わる……」

星奈「……………」

ブレイン「あなたがこれまで一番強い感情は検索した結果、それは『喜び』だからあなたにはこれで抜き取って上げますよ」

ブレインが懐から出したのは一枚のカード、その絵に書かれているのは……

星奈「キュアハッピーのカード……」

ブレインはキュアハッピーのカードを星奈の張り付いている台座の上に送信した。

ブレイン「これより君の脳内にプリキュア精神を注入し、君の感情を強制的に抜き取る。普通の人間なら精神崩壊し死に至ることもあります。しかし喜びの感情を最高潮に達した。今のあなたならそれが耐えられる」

星奈「なっ！そんなことが……」

ブレイン「スイッチオン」

バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチ!!

星奈「ぎゃあああああああああああ
!!!!!!」

ブレインのスイッチで星奈の体から電撃が放たれた。

―星奈脳内―

星奈精神「ここは……」

?「星奈ちゃんの精神の世界だよ」

星奈精神「え?」

私は声がした後ろの方向を振り向くとそこにいたのは

星奈精神「キュアハッピー……なの?」

ハッピー?「うん♪そうだよ」

なんとこんな誰もいない空間にキュアハッピーが私を助けに来てくれた。

私はあの時、安心したかのように思えた。

星奈精神「お願い！キュアハッピー！私を助けて！妹もここに囚われているはずだから……」

ハッピー？「莉歩ちゃんなら心配入らないよ……」

星奈精神「え？」

どうして莉歩の名前を私はキュアハッピーに一度も妹の名を口にしていないのに……

ハッピー？「どうしてかってそれはね……」サツ

星奈精神「へ？」

ハッピー？「こういうことだよ」ドオオオオオオオ
オooooooooooooooooon!!

星奈精神「ぎゃあああああああああああ!!!」

キュアハッピーは私に向けて必殺技を発動し、私はその勢いで吹き飛んでしまった。

星奈精神「キュアハッピー……なんで？」

ハッピー？「きやはははは♪もう正義の味方ごっこは終わったんだよ？星奈ちゃん」

星奈精神「え？」

正義の味方ごっこ……？

ハッピー？「そう！私達がこれまでやった活躍はね全てプリキュウス様を復活させるためのシナリオなんだよ♪」

プリキュウス？シナリオ？

星奈精神「どういうこと？」

ハッピー？「私達プリキュアはもともとプリキュウス様の体の一部だったんだ♪でもとーっても悪い勇者がプリキュウス様を倒しちゃったせいで私達はバラバラになったののおかげで薄汚い妖精達に濃き使われて大変だったよ」

これがあのキュアハッピー……これが妹が愛したプリキュアの正体!？」

ハッピー？「だから星奈ちゃん……」

星奈精神「え？」

ハッピー「あなたのハッピーいただくね♪」

ブスツ!!

星奈精神「ああああ!!」

モーション「他の実験体はどうするの？」

ブレイン「他の実験体はほおっておきなさい！まだ研究所はプリキュアキャツスルにもあるのですから！たかが第1、第2研究所を潰しても……」

モーション「それじゃ一刻も早く100号と110号と111号を回収しなくては……」

ピュン！

モーション「え？」

DWD隊員1「動くな！」

DWD隊員2「この研究所は我々が占拠した！もう逃げ場はないぞ！」

他の隊員達も合流し、銃をブレイン達に向ける

モーション「ちっ」

ブレイン「どうやら彼女達を回収するのは一苦労しそうですね……
せめて一人だけでも」

星奈「た……」

D W D 隊員 1 「ん？」

星奈「た・・・・・・・・す・・・・・・・・け・・・・・・・・て」

星奈の苦しくも隊員に助けを求める・・・・・・・・その瞬間！

プシユウウウー—————!!!!

D W D 隊員 1 「うわ！」

D W D 隊員 2 「煙幕か!？」

ブレインは密かに懐から煙幕弾を用意しそれを地面に叩きつけ煙幕を発した。

煙幕のせいでも見えす混乱する隊員達、その時、隊員1がなにかを察知し、銃を突きつけた。

パン！

モーション「うっ！」

モーションは星奈を連れ去ろうと腕を伸ばしたが隊員の銃の玉に当たって引いてしまった。

D W D 隊員 1 「大丈夫か？」

星奈「……………」

星奈を抱えた隊員は星奈の容態を調べるとどうやら気絶したみたいだ。

DWD隊員5「おい！こっちも一人回収したぞ！」

隊員の一人も別の部屋から星奈と同年くらいの少女を抱えていた。

DWD隊長「よし！研究所を一気に爆破するぞ！」

隊員「！！！！了解！！！！！！」

ドオオオオオオオオーーーーー！！！！！！

ブレイン「爆破されましたか」

モーション「どうするの？プリキュウス様にどう報告すればいいの？」

ブレイン「なあに、まだ研究所はあらゆる異世界に滞在してるんです。たかが研究所の一つや二つつぶれても造作はありませんよ。」

モーション「それに……」

モーションが抱えているのは5歳の少女、星奈の妹、黒井莉歩を抱えていた。

星奈「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

？「気がついたかい？」

星奈「・・・・・・・・・・・・あなたは」

勇一「俺は黄瀬勇一、君を助けた男だ」

星奈「・・・・・・・・・・・・」

星奈は周りを見渡すと星奈は隣のベッドで寝ていた少女が起き上がり星奈の方をみた。

星奈「あの娘は・・・・」

勇一「ああ、あの娘も俺達が助けた娘だよ！丁度君と同年だね」

？「あなたは誰？・・・」

星奈「私？・・・私は黒井 星奈・・・」

？「私は・・・・・・・・・真夜・・・・・・」

白戸真夜」

黒井星奈と白戸真夜、この出会いがどのような運命になるのか・・・
それは誰も知らない。

3話 DWD入隊

それから月日が立ち星奈と真夜は異世界都市アルカに存在する異世界防衛組織デイファレント・ワールド・デイフェンス通称DWDに所属した。

星奈「……真夜ちゃん……どこにいるんだろう？」

見習い隊員となった星奈は友人である真夜を探した時、

隊員1「おい！今白戸って奴があつちで男子と取っ組み合いになつてるぞ！」

隊員2「え！まじかよ！」

星奈「え！」

二人の隊員の話聞いた星奈は急いで真夜のいる方へと向かった。

―廊下―

見習い隊員 1「いいぞ！いいぞ！」

見習い隊員2「やれ！やれ！」

真夜「このおおお!!」

男子隊員「ああああああ!!」

真夜は相手男子隊員を馬乗りにし、そして相手の首を絞めようとする。それを見ていた周りの野次馬達は真夜を止めようと思う者はいなかった。彼女を除いて……

星奈「真夜ちゃん!」

真夜「星奈……」

駆けつけた星奈が現れ、真夜は両腕を離した。

上官「おい!お前ら!そこでなにやってる!!」

その時、駆けつけてきた上官によって真夜は罰として二日間の2日間の謹慎となった。

「そもそもなぜ私達がDWDの隊員になったのか、それは

真夜「星奈……ここのご飯……おいしいわね」

星奈「うん！病院のご飯ってこんなに美味しいんだね！」

真夜「いいえもともと病院のご飯って案外不味いものよ……」

星奈「そうなの？」

真夜「ええ、そうよ」

勇一「やあ、二人とも」

星奈「勇一さん！」

真夜「……」ペこり

病室のドアから入ってきた黄瀬勇一、今日は手にお菓子を待ってき
てくれた。

パク

パク

星奈「うーん甘い！」

真夜「……甘い」

勇一「……」

勇一の持つてきてくれたお菓子、種類はアイスで得にバニラアイスは他のと違って絶品だった。

星奈「どうしたの？勇一さん」

勇一「星奈ちゃん……そして真夜ちゃん、今日は君たちに単刀直入に伝えたいことがあるんだ」

星奈「へ？」

真夜「……？」

勇一「君達二人……俺が所属するDWDの隊員に入隊する気はないかい？」

星奈「勇一さんが所属する部隊？」

真夜「……」

勇一の言葉に驚きとあ然で固まる星奈、

星奈「あの……どーして私達がそのディーなんかの部隊に」

勇一「ああ、上層部はプリキュアによって両親が殺され、天涯孤独になってしまった子達をこちらから保護し、DWDの隊員として育てていくことを計画しているんだが……君達はどうする？別に無理にとはいわない……」

星奈「……私は」

真夜「受けます！」

私が悩んでいた時、真夜は即答でDWD隊員になることを決意した。

星奈「真夜ちゃん……？」

真夜「私はプリキュアに家族を殺され、友達も殺され、自分はこれからどうすればいいのか悩みました。でも勇一さんの誘いを聞いているから私の目標を見つけました！私をDWD隊員に入隊させてください！」

星奈「真夜ちゃん……」

勇一は真夜の目を見て、何か執念と怒りを燃やす目になっていることに気づいていた。

勇一「……わかった……君の入隊の件は上層部から伝えておく……星奈ちゃん、君はどうするんだい？」

星奈「え？私ですか？」

勇一「どうするんだい？無理にはいわないよ君の人生だ……」

星奈「私は……」

私はこれからどうすればいい……プリキュアと戦うなんて……そんなの……勝てる自信さえもないのに……

莉歩「お姉ちゃん!!」

星奈「私も入隊させてください！」

真夜「星奈……」

勇一「星奈ちゃん……」

父と母、祖父、祖母はもうこの世にはいない……でも妹は生きています。

勇一「いいのかい？君には別の未来もあると思うが、」

星奈「いいえ、私はプリキュアに大事な妹が捕らわれているんです。だから……私は妹を助けるため戦います!!」

星奈の目は真夜の目と違って決意と信念の目が変わっていたことに勇一は微笑んだ、

勇一「わかった……それじゃ星奈ちゃん、真夜ちゃん、君達をDWD隊員に入隊することを上層部に伝えておく通知は明後日に届くはずだから準備をすますように」

「はい!!」

そして私と真夜ちゃんはDWD隊員見習いとして入隊することが出来た。

そして今私たちは……DWD総司令官ミストによる私達見習い隊員の入隊式の言葉を発した。

両目を仮面で隠していて周りからかっこいいとかクールとか言うけど私からしてみればすこし近寄りがたい存在だった。

ミスト「諸君、異世界防衛組織DWDの入隊おめでとう、だがここから先は生きるか死ぬかの世界、君達はプリキュアから全ての異世界を守るという多大な義務を果たすため、明日から頑張ってもらおう！そして最後に……」

星奈「……………」

ミスト「君達の守りたいものはしっかり守れ！」

星奈「……………」

ミストのあの言葉を聞いて……私は大事な物を見つけた時、私は……守らなきゃいけない……そう感じた。